

「家庭の日」 作文コンクール

子どもが心豊かに健やかに育つためには、家庭や家族のあり方が何より大切です。青少年育成国民会議では、昭和 41 年から毎月第 3 日曜日を「家庭の日」とし、親子のふれあいや家族の団らんを推奨しています。

青少年育成鳥取市民会議においても、この取り組みの普及促進のため、昭和 57 年から毎年、市内の小学生を対象に家庭や家族に関する作文のコンクールを行っています。236 点の応募の中から、最優秀賞に選ばれた作文を紹介します。



国府東小学校 6 年

福田 愛莉さん
ふくた あいり

「父の背中」

「はあ、はあ、ゼー、ゼー。」

私は今、父の背中を見ながら走っている。お父さんってこんなに私のことを思ってくれていたんだ。改めて「父」の存在を感じながら家へ向かう。あかつきの空が橙色に変わる。陽の光がまぶしくなってきた。

朝、父といっしょに家から学校までの往復の道を走るようになった。それには訳がある。

私たちの学校では、「テレビを見ない日」に取り組んでいる。

初めは、毎週木曜日の食事の時にテレビを消していたが、今では、毎日消している。家族みんなの顔を見ながら、一日の出来事を話す方がおもしろかったからだ。祖母は畑でとれた野菜のこと。母は我が家のムードメーカー。いろんなことをおもしろおかしく話す。私や兄は学校であったこと。祖父はにこにこしながら聞いている。父もどちらかという聞き役である。コーヒーのかすで生魚を切った後手を洗うとおいがとれることなどちよつとした知恵も話題の中からもらえる。祖母や自然の恵みに感謝しつついただくご飯も

会話がはずむと、さらにおいしい。

市の陸上大会へ向けての練習が厳しさを増していたころ、私にはなやみがあった。でもそれと気づかれるのいやなので、夕食の時さり気なく、独り言のように話した。

「あのな。今、陸上練習をしようるだが。六百メートル走ることにしたけえ。去年のタイムの二分十三秒を上げたいのだけれど、思ったように上がらん。もうこれ以上速く走れん。友達にも負けるし。」

と。すると、父が私の小さな声を聞きとって、

「何ようるだ、愛莉。愛莉は愛莉だ。人と比べんていいけえ。限界の線引きをしたらいけん。挑戦しんさい。朝お父さんもいっしょに走るけ。」

と、真顔ではげましてくれた。その会話があった次の朝から、父と私の二人のマラソンが始まったのだ。

仕事の後、いつも宿題の本読みを聞いてくれたり分からない所を教えてくれたりする父。そうしてくれることを当たり前だと思っていた私。今までも優しい父であったが、弱った心の私の気持ちに本気になって答えてくれた父に、ぐつときた。何よりも「愛莉は愛莉だ。」の言葉が私を温かく包む。とにかくがんばってみようと思った。

父に追いついて並んで走る。

「こされまい、こされまいするけえ、えらくなるだが。自分のペースをつかむだで。」

と、息を切らしながら、私を見て言った。ひたいからしたり落ちる汗。父の愛情の深さをひしひしと感じた。

市の陸上大会の日、私は父の背中を思いうかべながら走った。

「愛莉は愛莉だ。がんばれ。」の言葉といっしょに。私の

記録は二分八秒だった。

お父さんありがとう。がんばったけえ。



佳作
藤原大輔さん 附属・1年
森脇真美さん 附属・1年
小谷華穂さん 世紀・1年
佐々木開成さん 醇風・1年
細田穂乃佳さん 醇風・2年
山根安里紗さん 醇風・3年
横山結紀さん 美保・5年
蓮佛杏沙さん 世紀・6年
坂本佳子さん 西郷・6年
坂本尚子さん 西郷・6年
坂本宗之さん 西郷・6年
佐野の々花さん 附属・6年

優秀賞
平尾真結子さん 津井・1年
圓井陽子さん 醇風・1年
廣岡知明さん 倉田・2年
植田寛之さん 久松・4年
谷長真帆さん 西郷・4年
西垣啓汰さん 世紀・4年

問い合わせ先

生涯学習課（文化センター内）

☎(0857)20-3361